
私、日本ちゃんになりました！！

春子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私、日本ちゃんになりました！！

【Nコード】

N4305T

【作者名】

春子

【あらすじ】

突然 「あなたは養子です。あなたの本当の兄が今朝亡くなりました。あなたに次の『日本』を継いでもらいます。」と言われた少女【桜】とその仲間が繰り広げる学園物（の予定）。
いまは、そんな風ひとつふかしていないけど・・・。

* 6月12日 タイトル変更しました。。。

第1話 「私の日常」 (前書き)

この作品はにょたにほを出すため、
本家の日本は1話で死にます。

それでもいい方だけお進みください。。。。

第1話 「私の日常」

「おはよう!」

「おはよう」 お母さん ・ ・ ・ おまけとして お父さんも

「今 さりげなくひどくなかったか?」

「気のせいだよ」

「なんか 娘の育て方間違っ たかな ・ ・ ・ 」

この会話から始まるのが私 『鈴木 桜』の一日だ。

しかし、いつも通りの朝を迎えたはずなのにあるニュースが私の一日 ・ ・ ・ いや運命^{すべて}を狂わせた。

@ @ @

私はくいつも通りリビングのテレビをつけた。

『次のニュースです。』

今日午前4時ごろ東京タワーの前の木で首をつって死んでいる人が発見されました。

遺体は* * * 県* * * 市の「本田 菊さん」だとわかりました。

・ ・ ・

「 ・ ・ ・ あれって もしや 」

「もしかしくなくても、よ 」

「何? お母さんたちの知り合い?」

「 うっ うっ うん! 何でもない何でもない! 」

「そう?」

「ほら! そんなことより 学校遅刻するよ!」

「まだ 半端なく余裕あるけど」さっ! 早くいきなさい!」・・・
「はい。」

それが我が家でとった最後の<朝食>になるとは
その時の私には 知るよしもなかった・・・。

第2話 「突然の真実 1」

『学校行くとき前の両親がおかしかった。』

それ以外は、何にもない【普通の日】だった。

登校中も S H R のときも 授業中も 部活中も 下校中も・・・

「ただいま」

「・・・」

（おかしいな・・・。今日は二人とも早く帰ってくる日なのに）

不思議に思いながら玄関で靴を脱ぎ、リビングへと向かった。

リビングにあるテーブルの上に母からだと思われるメモがあった。

『今日、ママやパパの帰りは遅くなりますが、その後、桜の将来についての「重要な」お話があるので、眠らずに待っていてください。』

母

「重要な」のところに少し引っかけたがそれ以外は【よくある】メモだった。

こんなメモ前にもあった。だが、どうでもいいくだらない話だった。また、くだらない話だろうと思ったが、朝の件が気になってそのまま待った。

@ @ @

「ただいま・・・」

結局、両親が帰ってきたのは夜10時頃だった。

しかし桜は、そこが気になったのではなく、彼らに元気がないのが気になった。

「おかえり。・・・どうしたの？元気ないね」

「何でもないよ・・・。それより晩御飯食べよう。」

そういわれて今日晩御飯お食べていないことに気づいた。

第2話 「突然の真実 1」 (後書き)

短い・・・!!

でもこんな感じでいきます(笑

第3話 「突然の真実 2」 (前書き)

お初の感想がかなりうれしかった・・・！
これからも短いながら頑張ります！！

てか この作品みたいな文章打ったの初めてです (笑

第3話 「突然の真実 2」

晩御飯は、母が作り置きしていたもので軽く済ませた。
だが、私とその間つらかったのはそんなことではなく、『空気が重
かった。』ということだ。

【いつも】なら、いくら疲れていても会話があつてにぎやかなのに
。。。

だが、その空気をぶち壊すために言葉を発するほどの勇気が私には
なかった。

@@@

結局、会話がないまま食事は終わった。

その後、私が震えるような声でがんばって発したのは、

「ところで、私の将来についての「重要な」話って何？」

「……………」

なんだ、返答がないじゃん……。
がんばって声に出したのに結局その返答がこれ？
なんか「ずるい」……

@@

それからどれくらいたってからだろうか。
両親が話し始めたのは……。

「実はね……あなたは、養子なの。」

だから、血もつながっていないし、まったくの無関係。」

えっ……。何それ……。

桜は絶句した。戸惑った。

その様子を見て、両親はしばらく黙りこんだ後、口を開いた。

「黙っててごめんなさい。言いづらくて……。

だけど、私たちはあなたを実の娘だと思って育ててきた。」

「ちよっ！ちよっ！待ってよ！

なんで……。だまって……。た……。の……。？」

やっとの思いでそれだけ伝え、涙をこらえながら返答を待った。

「今まで、何度も言おうとしたんだけど……。

やっとの思いで築き上げたこの【普通】を壊したくなかった。
だから……。」

二人とも、涙をこらえてたらしくその先は聞こえなかった。
でも、その先は聞きたくなかった。

今聞いても、言い訳にしか聞こえなかったと思うし、これ以上聞か
されても情報整理できる自信がなかった。

「二人とも……。ずるいよー！」

それだけ言って、私はリビングを飛び出し自分の部屋でベッドに倒れ、泣いていた。
頭の片隅で、ある疑問を抱きながら・・・。

『両親はどうして今日、その話をする気になったのだろうか？
もしかして、その先にもっとつらい話があるのではないか・・・。』

しかし、そんなことがあるにしろ、もう今日は聞きたくなかった・・・。

第3話 「突然の真実 2」 (後書き)

ほんと、私の小説短いすよね・・・。

第4話 「突然の真実 3」

気が付いたら朝になっていた。

どうやらそのまま寝てしまったらしい。

起きたが、しばらく「ぼぉ～」としていた。

昨日あんなことがあって両親に顔を合わせずらいのと、あんなことを言ってしまった自分への懺悔で、どうしてもリビングのある1階に降りる気になれなかった。

@@@

どれぐらい時間が経っただろう。

ようやく、降りる決心がつき会談を1段1段降りた。

@@@

「お・・・おはよう・・・。」

「あらっ！おはよう、桜。」

「おはよう。」

二人は、昨日あんなことがなかったかのように桜に接した。

昨日気になっていたことを聞くなら今しかない、と決心したその時・

「ごめん桜！ 起こすの忘れてた！」

「えっ！ やばい！遅刻じゃん！」

お母さんがそう切り出すまで、時間なんて気づかなかった。

「朝ごはんどうする!？」

「朝ご飯食べてる時間無いから、購買で買っ！
行ってきますす！」

じゃあ！

その日の朝、私は時間に少し感謝した。

聞こうと思ったが、実をいうと「怖かった」。

だから、聞かずに済んだことに感謝した。

だが、そのことをすぐに悔やんだ。

@@@@

その日、今朝聞きたかったことが頭を離れず、「ぼお～」としていた。

授業・・・このままだと、点数落ちるよな・・・。

そんなことを思いながらも、頭の中では【あの件】でいっぱいっぱいだっただ。

それだけでも、桜にとって精神的につらかった。

しかし、今一番つらいのは・・・

自分おのれと自分の終わりなき戦いおのれを続けている自分の存在に気付くこと・・・。

@@@@

桜にとって、いつもと同じ時間でも、今日に限っては、その数倍、数十倍、もしかしたら数百倍にでも感じられただろう。

そして、そんな待ちに待った、来てほしくて来てほしくなかった時間になった。

第4話 「突然の真実 3」 (後書き)

はい・・・、途中からわけわからなくなりましたよね・・・。
作者もわかってません(笑)

感謝だじええええええ！

読者の皆様

そして、アドバイスくれた同級のMさん

第5話 「突然の真実 4」 (前書き)

今気が付いたんですけど、

1番最後に始めたのに1番進んでいますね だめじゃん。。。

ありがとうございます。

第5話 「突然の真実 4」

桜は、その日がんばって乗り切り今、家の前にいる。

正直に言うつと、入りたくて 入りたくなかった。

「ただいま」

「おかえり」

なんと、両親は私より先に帰ってきていた。

ちなみに今は、午後6時だ。

「桜、着替えておいで。昨日の話・・・続きがあるから・・・。」

空気にやっぱ悪い話だと思った。

あ・・・、やっぱりか。

だったら早くいつて・・・！

そう思った桜は、すぐさま自室で着替え、リビングに戻った。

@@@@

「・・・で話って何？」

「あなたが、養子だって話したよね？」

「うん・・・。そこまで聞いたよ。」

お母さんはそのまま黙ってしまった。
そのかわりに、お父さんが口を開いた。

「昨日の朝のニュース、覚えてるか？」

「えっと・・・、たしか東京タワーの前で自殺があったんだよね。」
「そう。」

「まさか、その人が私の本当の親？」

「・・・勘がいいね。でも、少し違う。」

その人は、桜の本当の・・・兄だ。」

「ちよっ！ちよっと待ってよ！」

確かに私に関係があるのはわかったけど！」

「けど？」

「今、話すことではないよね？」

「・・・この先は、【彼ら】に任せたほうがいいかもね。」

彼らって誰？ と聞く前に、お父さんが入ってきてくださいと
客間のほうに声をかけた。

その声には答えず、二人ほど入ってきた。

@@@@

「桜、紹介するよ。こちらは、本田菊さんの知り合いのえ〜と・・・」

「ルトヴィツヒ・バイルシュミットだ。」

「ケセセセ・・・俺様は、ギルベルト・バイルシュミットだ。」

「・・・どうも。鈴木 桜と申します。」

この二人と、一生つるむなんて、このとき、私は想像していなかった。

第5話 「突然の真実 4」 (後書き)

やっと、本家の方が（菊以外で）できましたね！

ルートは最初持つてくることが決まっていたのですが、
書いている途中から、作者がギルの良さに目覚めてしまったんで（笑

作者自身腐っているので、この先

桜は、誰かとくっつくかもしれない・・・。

そのこととは別の話ですが、来週から作者の学校では、テスト2週間前となるため、書きません。

ご理解とご協力を・・・。

第6話 「突然の真実 5」 (前書き)

2週間かけないのが切ないので 今のうちに大量に書こうと・・・。

今日2話かけるかな・・・。

第6話 「突然の真実 5」

「では、お願いしていいかな・・・。」

「はい。でも、あまり聞かれない秘密事項があるので、桜にだけ話します。」

よろしいですか？」

「では、さっきの客間を使ってください。」

「んじゃ！早速行くか！」

「えっ！つちよつちよつと待って！」

そういわれ、ギルベルトさん（だったはず・・・）に手を引かれた。

@@@

「改めて、はじめまして。 鈴木桜さん。 ルートヴィッヒ・バイル シュミットです。」

みんなには、ルートと呼ばれています。」

「んで俺が、ギルベルト・バイルシュミットだ！みんなには、ギルとか、ギルベルトとか呼ばれている。」

「鈴木桜です。みんなには、桜って呼ばれています。 あと、敬語使わなくていいです。」

「そうか・・・。 よろしくな、桜。」

「よろしくしてやる！」

その後、たわいもない話を十分くらい話した。
その時間が、私の悲しみと、緊張をかなりとってくれた。

「あの．．．。質問が2つほどあるのですが．．．。」

「いいぞ。質問は短く簡潔にな。」

「1つめは、なぜ．．．」

お二人の下の名前が一緒なのか？です。」

「あゝ、その件か。それは、俺らが兄弟だからだよ。」

「えっ！」

「言ってなかったか？俺様が、こいつの兄だよ。」

「で、俺が弟だ。」

なんか、イメージと違う．．．。

ギルさんがお兄さんで、ルートさんが弟さん？

「よく聞かれるよな。」

で、最後あれ！？順番逆じゃない？って聞かれる。」

「パターン化してるよな（笑）」

私がさっき思ったことは、他の人も考えてたんだ．．．。

「そういえば、もう一つの質問を聞いていなかったな。」

「あっ！そういえば、言ってなかったですよね？」

本当は、もう少し話を伸ばしたかった。
だって次の質問は．．．。

第7話 「突然の真実 6」 (前書き)

今日2話目ですよ・・・。

来週できないから。。。

第7話 「突然の真実 6」

「では、二つ目の質問をさせていただきますね。

今回、私の兄が死んだことと、

ただいま開催されている『大暴露大会』には、どんな関係があるのですか？」

「すごい答えづらいな……。だが、核心をついている。」

「まあ、聞かれなくとも、これからするつもりだったしな。」

そこから、私には無関係のような話かなり出てきていて、

【真実】か【偽り】かわからないような話だったため、鮮明に覚えている。

@@@

だが、あまりに長かった。

桜は自分用に持ってきていた飲み物を飲むのを忘れ、聞いていたルートの話 요약するとこうなる。

@@@

桜の兄【本田 菊】や今日の前にいる自分たちは、国がそのまま、人になった姿だという。

そして、【日本】として生きていた中、突然【本田 菊】は自殺をしたため、

まだ、次の【日本】が決まっていなかったという。

そんな中、次に【日本】が決めた器が【鈴木 桜】だった。

@@@

「・・・ということなんだが。」

「つまり、私に何をしろと？」

「次の日本になってもらいたい。」

「はい？」

「次の日本になってもらいたい。」

「ちよつと待ってください！そんな簡単になれるんですか？」

「【日本】が決めたことだし、そんなに難しくくない。」

「俺らの時も、難しくなかったしな。」

「それに、人間の時とほぼ同じ流れで生きていればいい。」

「ルートさん、今遠まわしで、人間じゃなくなるといいましたね。」

「だから、何度も言ってるだろう。国になってほしい、と。」

「・・・。」

「その件に関して、私に拒否権は？」

「そんなものない。」

「あつたら、俺らもここにいないしな（笑）」

「・・・。」

「まあ、そういうことだ。」

「とりあえず、今日俺らは、このまま帰る。」

「そうだな。親子最後の1週間を邪魔したくないしな。」

「来週、また来るわ。」

「それと、俺らのメアドだ。」

「何かあつたら、連絡してくれ。」

「ちよ！さっきのどういうこと・・・。」

「じゃあな。」

そういつて、二人は家を出た。

親子最後の1週間って？と聞けなかった。

今回みたいに、後悔しなければいいけど・・・。

第8話 「突然の真実 7」 (前書き)

昨日と同じですね・・・。

2話できるように頑張ります!!

第8話 「突然の真実 7」

桜は、二人が帰った後、自分の部屋で泣いていた。

人間ではなくなる・・・？

では、何になる・・・？

国になる・・・？

わからない。

【真実】がどれだかわからない。

もしかしたら、全部かもしれない。

もしかしたら、全部嘘かもしれない。

なんで なんで なんで なんで なんで ・・・

【答え】はどれなのだろう・・・。

そんなことを考えながら・・・。

@@@

気が付いたら、朝だった。

おとといと同じように、泣きながら寝てしまった。

しかし、昨日は、寝たのが早かったらしく、起きる時間も早かった。
桜は、時間を見た後シャワーだけでも！と

お風呂場へ向かった。

@@@

「おはよう。お母さん、お父さ・・・？」

いつも通りいると思っただが、いなかった。
しかし桜は、昨日ほど驚かなかった。

またか・・・。まあ、慣れたからいいけど・・・。

しかし、【いつものパターン】だったらあるメモ書きと
作った朝ごはんがあるはずだが、今日はなかった。

「・・・めんどくさいし、近くのコンビニで買つか。」

そっいつて、自室でお金を数え、あとで、今日の分をもらおうと、
心に決めた。

@@@

学校に行く準備をした後、そのまま出かけた。

そのまま、近くのコンビニに行き、おにぎりを3個買った。

その後、学校行行って、クラスの人がある前に、すべて食べてしま
おうとした。

が、そのあとすぐに桜の幼馴染の【優斗】が来た。

<がらん！>

「おはよう・・・、あれっ！桜じゃん！珍し・・・てか、何食って
んの？」

「おはよう、優斗。それと、一度に全部聞かれてもわからないから。

」
「質問は一つだけじゃん。」

「確かに（笑。じゃあ、質問に答えると、朝ごはん。」

「そっちかよ……。違うよ。桜は何を食べているかってこと。」
「見たまんま、おにぎりだよ。おにぎり差し出しながら、これは塩じゃけです、とは言いません。」

「じゃあ、もう一つ質問しますけど、具は何ですか？」

「何って、お米と、海苔と、水と」もういいです……。」「いいの？」

「いいよ……。これもらうから！」

「もらうんだったら、金返せ！105円！今すぐ！」

「いやだよ……だ！」

「……。この＜自主規制＞が服を着て歩いているような物体のくせに生意気だ……！！」

「うわ！ 朝っぱらから自主規制がかかるような言葉使っな！」

（10分後）

その後も桜は、自主規制がかかる言葉を大量に吐き出した。

「はあっ……。はあっ……。はあっ……。」

「お互い疲れているみたいだし、やめつか！」

「お前が、おにぎり返してくれるならな……。」

「もういいよ！ 桜が食べているの邪魔したかっただk（殴）」

（がらん！）

「おっはよう！ 朝からお二人さん、アツアツですな……。」

「！！ そんなんじゃないからな！」

別に、焦っている桜が見たかったんじゃないからな！」

（（ツンデレめ！））

（奥様、知ってますわよ。あの子、十年近く桜さんに片思いなんで

すって！)

(まあ！本当ですよ！？優斗君も大人の階段のぼってしまいましたね〜！)

等々、かなり心の中では、苛め抜かれている優斗たん。

そんなの知らんぷりで、おにぎりの続きを食べる桜たん。

二人とも、そんな中朝のSHRの時間を迎えた。

第8話 「突然の真実 7」 (後書き)

途中、桜たんのお風呂関連は、自粛しました。

これ以上やると、作者の個人的な趣味になってしまいかr (殴

第9話 「知らされた残酷な運命 1」 (前書き)

サブタイで残酷とか言ってますけど、
そっちの残酷では無く、こっちの残酷です。

というわけで、残酷な描写ありにはしません(笑

第9話 「知らされた残酷な運命」¹

<がらん!>

「みんな、おはよう」

「「先生、おはようございます。」」

先生が入ってきて、教壇に立った。

「さて、残念ながらお知らせがある。」

【鈴木 桜】が、今日から【本田 桜】になること、そして、

今週の土曜・・・、つまり明後日転校することが決まった。」

「えっ・・・!!」

桜は、動揺を隠せず思わず立ってしまった。

「なんだ・・・？お前聞いていなかったのか？」

「聞いてないどころの問題じゃないですよ!!」

「でも、そういうことだ。たしか転校先は・・・『W学園』だったかな。」

「・・・。」

キンコーンカーンコーン

「それじゃあ、残りの間、みんなと仲良くな。」

@@@

何それ？

お兄ちゃん、私をどこまで苦しめれば気が済むんですか？
どうして、こんな仕打ちを受けなくてはいけないのですか？

桜は、そんなことを考えていた。が、その時間は長くはなかった。
なぜかという・・・

「桜！！」

「えっ！！ 優斗、どうしたの！？」

「どうしたもこうしたもねえよ！」

なんでそういうこと早くいつてくれないんだよ！」

「だって、私だって今初めて聞いたんだよ！」

それを、早くなんてどうやったら言えるの！」

「それは！・・・。」

「もう！私の気も知らないで！ 優斗なんてもう知らない！」

「！！ あゝそうかよ！ だったら、こつちのことにもう首出すな
！」

「何よ！ 先に突っ込んできたのはそっちでしょ！」

そういつたら、優斗は自分の席に戻ってしまった。

あ・・・。また、本気で怒っちゃった・・・。

もう優斗には本気で怒らないって決めていたのに・・・。

@@@

12年前・・・

「ねえ優斗！ 早く遊びに行こうよ！」

「もうちよつとで終わるから！」

「一緒に遊ぼうって言うてきたのはそっちでしょ！」

「だって、もう少し後に来ると思っっていたんだもん！」

「だもん、じゃないでしょ！だもん、じゃ！」

「うるさいな！もう少し静かにしてよ！」

「そっちが急いでくれればこんな大声出さないわよ！」

そういうと、優斗の頬が膨らんだ。

よく見ると泣いていた。

「あつ！ ごめん……。」

「もう桜なんか知らない！」

そういつて家を飛び出した優斗は、前を見ていなかった。

「何よ……、優斗なんて……！」

<ガシャン！>

え……。

なんかあったのかな。

外では、キャー……という叫び声も聞こえた。

そんな中、「優斗、しっかりして！」という声が聞こえた。

桜は、あわてて外へ飛び出した。

そこには、車にひかれた優斗がいた。

「優斗!!」

ごめんなさい！私があんなに怒らなければ！

それから少し経ったら、遊べるほど元気になった。

幸いにも、傷が軽傷だったため、すぐ退院できた。

が、あの後しばらく彼の両親が彼を外に出すのを許さなかった。

それ以上に桜自身も精神的に傷ついていたため、外に出なかった。

@@@

その時だった、優斗への懺悔でうまく接することができなくなったのは・・・

第9話 「知らされた残酷な運命 1」 (後書き)

ちよつと桜さんの過去も書いてみました。

優斗との接し方が昔ほどうまくないのにはこんな理由が・・・
(作者が納得)

まあ、それは置いておいて、次は多分、今まで出てきたキャラの紹介かと・・・。

キャラクター紹介（前書き）

前回の予定通り、キャラ紹介で・・・

桜たんの外見とか、年r（殴

等々・・・。

キャラクター 紹介

* 本田（鈴木） 桜*

- ・ 年齢 : 17 歳（高2）
- ・ 血液型 : O 型
- ・ 誕生日 : 12 月 3 日
- ・ 身長 : 156 cm
- ・ 体重 : （本人の希望により載せません。

しかし、決まっているので知りたい人は感想で言っ

てください）

- ・ 部活 : 考古学部
- ・ 外見 : 髪は、黒髪でストレート（腰あたりまで）
スタイルはいい。 が、（本人として自粛）は小さい。
顔的にもてる。
- ・ 性格 : 初対面だったり、あんまり話したことない人には性格
はいい。

- ・ 備考 : 慣れている人には容赦なし。 つまり、猫かぶり。
自己規制な言葉も結構使う。
かなりもてる。

てか、かなり秘密裏にだが、ファンクラブがある。
が、本人はそんなの気にせず・・・。
ラブレターとかは、よくもらうが読まずに捨てる派・・・

その前に、恋愛関係興味ない

（それでいいのか、青春時代・・・）

あと、かなり食い意地張っている。

1 食分が半端ない・・・。

* 本田 菊 *

・ 享年 …… 27 歳（の設定・・・）
・ 血液型 …… O 型
・ 誕生日 …… 2 月 11 日
・ 身長 …… 165 cm
・ 外見 …… ご本家と同じ
・ 備考 …… 【日本】の重みに耐えきれず自殺。
桜のことは、かなり気に入っていて、「それ、ストーリー
カー行為」

的なこともかなりやっている。つまり、シスコン。
あとは、ご本家と同じ。

* 篠宮 優斗 *

・ 年齢 …… 17 歳
・ 血液型 …… A 型
・ 誕生日 …… 1 月 12 日
・ 身長 …… 174 cm
・ 体重 …… 57 kg
・ 部活 …… サッカー部
・ 外見 …… 髪は普通に黒髪でちょうどいい長さ
顔はかなりのイケメンさん（笑）
・ 性格 …… 桜と同じく猫かぶりというか外面だけいいというか・・・

でも規制がかかるような言葉は使わない。

本来だったらモテモテだが、好きな人がいるのは
学校中に知れ渡っているため、ほとんどの生徒があき
らめている。

が、たまに呼び出しくらう・・・

桜とは3歳ぐらいからの付き合い。

キャラクター 紹介（後書き）

的な感じですね・・・。

他にも紹介してほしいキャラなどはどんどん言ってくださいー！
すぐにはできないけど、まとめて後で・・・！

第10話 「知らされた残酷な運命 2」(前書き)

きょうは、学校行く前に1話とあとは、学校で考えます。

だから、3、4話いけたらいいなああああ、と・・・

第10話 「知らされた残酷な運命 2」

その日の私のクラスは、空気が重かった。

理由は、朝やってしまった優斗と桜の喧嘩。

あの後二人は、かなりの勢いでどす黒いオーラを出していた。

クラスであの件を知らないごくわずかな人は何事かと、

クラスであの件を知っている大勢の人は早く仲直りしてくれないかと、思っていた。

その日の桜・・・

「ねえ、桜！」

「何？ 彩菜・・・。」

そう、今声をかけてきたのは高校入学当初からの親友 宮間彩菜だ。

今までは、二人が喧嘩した際の仲介人的存在だったが、

しかし、今回に関しては桜を説得しようとしていた。

理由は、今回現況を作ったのは桜だし、

今、ある人に優斗の説得をしてもらっているからだ。

「何も優斗君だけが悪いわけじゃないでしょ。」

「じゃあ、私も悪かったっていうの？」

「そこまでは言わないけど、優斗君の気持ち、わからなくもないでしょう！」

「たしかに、今まで言わなかったって他の人は思うだろうけど、

本当に今回知らなかったんだもん。 家庭内での問題で頭がいっぱいだっだし・・・。」

「？何それ・・・？ 私には話せないこと？」

「・・・聞いても後悔しないなら言っけど？」
「じゃあ、話して。」
「・・・。」

@@@@

それから、この数日の間起こったことをすべて話した。
養子の件、本当の兄の自殺の件、ルートさん達が話してくれた国の話・・・。

彩葉は、息をのんだ。

「どう？ 私的にはかなりつまらなただけど・・・。」

「ありがとう・・・。」

そっか、だからこの頃桜授業中とかばぁとしてたんだ。」

「そう。でも、どこにも転校の話なんて出てこなかったよ・・・。」

「出しちゃえば？」

「えっ！」

「家に帰ったら、その・・・ルートさん？達にメールで聞いてみれば？」

「あゝ！そっか！その手があった！」

「でしょー！」

「ありがとう！」

キンコーンカーンコーン

「ほら！ 授業始まるよ！」
「うん！」

第10話 「知らされた残酷な運命 2」 (後書き)

すいません！

時間的に ここで切ります！！

そして、誤字がかなり多かったので訂正しました。
誤字があったら、感想で言ってください

第11話 「知らされた残酷な運命」 3

その日の優斗・・・

桜と違い、かなり荒れていた。

そんな優斗が怖いために、説得に立ち上がったものがいた。

「なあ、優斗。」

「あゝ？ なにか用か？」

「いい加減機嫌なおせよ」（泣）」

「そんなの関係ないだろ・・・。」

「そりゃ、たしかにお前の気持ちもわかるけどさ。」

「・・・。」

「桜さんの気持ちも考えろよ。」

「あゝゝ！ もういい加減にしろよ、りゅうた竜大！」

そう、説得に立ち上がったのは まみや りゅうた間宮竜大。

高校入学当初からの親友で、サッカー部のエース。

ちなみに、桜の説得にあたっている彩菜の双子の弟だ。

「・・・お前だってもうわかってるんだろ？」

桜さんのさっきの態度で、く知らなかったっていうのは本当なんだって・・・。」

「・・・わかってる。」

「だったら、さっさと謝ってこいよ。」

『さっきは言いすぎました。ごめんなさい。』って・・・。」

「それじゃあ、逆に桜の機嫌を損ねるだけだから・・・。」

「よく知ってるな・・・。」

「そりゃあ、三歳の頃から知ってるからな・・・。

でも、【他人】だから、お前等^{ふたこ}みたいに生まれた時から知ってるわけじゃない。」

「それいつたらおしまいだろ・・・。」

「・・・。」

「（さつきからのだんまりが悲しいほど怖いな）でもさ、どっちにしろあと3日だろ？」

「だったら、仲直りして別れたほうが絶対得だって！」

「でも、今日する気にはなれない・・・。」

「何も今日とは言ってないだろ？」

「明日だって（ぎりぎりだけど）明後日だってあるだろ？」

「言うとしても明後日になると思う・・・。」

「そっか・・・。まあ、がんばれ！」

「ああ。」

キンコーンカーコーン

「ほら、席に戻れよ。チャイムなってるだろ？」

「ああ。だけど、必ずしろよ！」

「・・・。」

優斗は、何を考えているのだろう。

謝るにしたって早いほうがいいと思うのに、ぎりぎりの明後日謝るとは・・・。

まあ、奴のことだから何か考えているのだろうけどな・・・。

第12話 「知らされた残酷な運命 4」 (前書き)

昨日 ノルマ達成ならず・・・。

まあ、今日がんばるぞ！

第12話 「知らされた残酷な運命 4」

桜は、授業が早く終わることを期待していた。
なぜなら、【今回の件^{てんこう}】についてルートたちに早く聞きたかったからだ。

こんな話聞いてない！

さて、「ああ、言い忘れてた！」なんて言ったら、

どうして差し上げましょうか・・・（黒笑

八つ切り？ 微塵切り？ 闇討ち？ それとも素直に真つ二つ？

・・・なんてことを考えていながら。

@@@@

やっと待ちに待った放課後。

桜は、部活のメンバーを適当にひっくるめて部活をせずに帰った。

帰るとき、優斗のそばをわざと通り、

「また、明日ね・・・。」と小声で言った。

優斗は、無視をしたけど、そのまま喧嘩にもっていつてしまいそうだからそのまま帰った。

@@@@

学校を出たらすぐにダッシュで家に向かった。

「ただいま!!」

「お、おかえり・・・。」

どうやら、すごい顔で帰ってきてしまったらしく、両親がやや引き気味だ。

まあ、話す時間がもつたないし、そのまま自室に行った。

@@@

部屋に入るなり、制服のままベッドに飛び込み、メールを打ち始めた。
文面はこうだ。

こんにちは、ルートさん。 本田桜です。

今日は、少し腹が立っているので、早速本題に入らせていただきます。

本題って？ と思いますよね。

本題とは転校の話です！ 私聞いてませんよ！

そのせいで幼馴染とは喧嘩するし、もう今日はサイテーですよ！

その他に、いろいろ聞きたいことがあるので
即急にメールください！

本来はこんなメールではなく律儀な手紙風なメールなのだが今日だ

けは別だ。

まあ、「即急に」って打ったし、すぐに返信が来るでしょう。

@@@

結局、返信が来たのは10分後のことだった。

第12話 「知らされた残酷な運命 4」 (後書き)

最初のほうに出てきた殺し方はこのあいだ作者が妹に言った言葉です(笑)

てか、今回区切多!!

第13話 「知らされた残酷な運命 5」 (前書き)

本日二話目！

第13話 「知らされた残酷な運命 5」

桜はおそろおそろメールを開けた。

遅くなつてすまない。

転校の件は俺も今さっき聞いた。
実をいうと、勝手に学園側が決めてしまいこっちにまだ連絡すら来ていない。

兄さんも正確なところまで知らなかったらしい。

これは余談だが、

実は俺らが帰るときに兄さんが言っていた「親子最後の1週間」は、俺や兄さんが【国】になるときと同じならそうだろうな、という確信のない話だったらしい。

あと、俺らも学園に行っている。

学園に入るとその後、今いるところに必ずと言っていいほど戻れないから、

今のうちにやりたいこと、したいことやっておけ。

学園での生活とかは聞いてくれ。

学園での生活は、俺も兄さんも長いからな・・・。

では、また連絡する。

ルートヴィッヒ・バイルシュミット

．．．。

ルートさんだったら知ってると思ったのに．．．。

その後、桜の脳裏にはある人物の名前が浮かんだ。

優斗．．．！！

やだよ．．．。

優斗と離れたくないよ．．．。

まだ一緒にいたいよ．．．。

会いたいよ．．．。

そこまで思ってた気づいた自分の^{おもい}気持。

せつかく、気づいた自分の気持ちを伝えられずに、
．．．。 離れたくないよ．

優斗．．．。

私やっとわかった．．．。

優斗のことが好きなんだって・・・。

第13話 「知らされた残酷な運命 5」 (後書き)

なんか、人間関係半端なくぐじょぐじょだ〜 (泣

まあ、作者の人生自体人間関係ぐじょぐじょなんだけどね・・・。

第14話 「知らされた残酷な運命 6」 (前書き)

桜は、自分の気持ちを素直に伝えられるのか!?

第14話 「知らされた残酷な運命 6」

その日は、そのまま寝てしまった。

@@@

次の日、桜は早く起きた。

「おはよう。」

「おはよう、桜。」

「おはよう。」

今日は、二人とも居た。

「朝ごはん、どうする？」

「今日は、学校に早くいきたいからいらない。」

「そっか。じゃあ、おにぎりにする？」

「お願い。ちなみにいつもと同じ量お願いね。」

「了解。」

「なんだ？ 桜が朝ご飯食べないなんてめずらしいな。」

「まあね。でも、最近は多かったよ？ 誰かさんたちのせいで。」

「すいません。」

「ねえ、真面目な話していい？」

「・・・転校の話か？」

「なんでわかったの？」

「・・・。 お前何年俺らが育てたと思ってるんだ？」

「・・・15年。」

「正解。 ちなみにそれまではお兄さんが育ててくれてたみたいだぞ（笑）」

「そうなの？」

「つて言ってた。」

「本題入っていい？」

「いいぞ。」

「知ってるの？ 転校先がどんなところか。」

「ああ。」

「じゃあ、なんで転校させる気になったの？」

「【日本】になるんだろう？」

そうになると、暗殺の可能性が高くなる。

だから、桜を安全なところへ、と思っただからだ。」

「・・・。」

「そういうことだ。」

「ほら、今日は早くいきたいんじゃないの？」

「うん。」

「荷物、私たちが勝手に片づけていい？」

「うん。」

「じゃあ、行ってきます。」

「いってらっしゃい。」

このとき私は、私が養父たちと話す最後のチャンスだったとは思わなかった。

@@@@

学校には、昨日より10分ぐらい遅れて着いた。

といつても予鈴が鳴るまでには、かなり時間があった。

「おはよう。」

誰かいることを期待して、桜は挨拶をした。

が、誰もいなかったなので誰も返してくれなかった。

第14話 「知らされた残酷な運命 6」 (後書き)

中途半端ですよね (笑)

この後、1、2話で第1章終わりです。

第15話 「知らされた残酷な運命」7

しばらくたつと、みんな来た。
が、予鈴が鳴っても優斗が来なかった。

優斗、遅いな・・・。

@@@

<がらん！>

「みんな、おはよう。」

「「「おはようございます。」」」

「えゝ、今日の日直は++++だ。
欠席は、篠宮 優斗だ。」

え・・・。

桜は、気が付いたら立っていた。

「どうした、本田？」

「あつ！ いえ、何でもありません！」

気が付いた桜は、湯気が出そうなほど赤くなっていた。

しまった・・・。

優斗が休みつて聞いてつい立ってしまった。
今日、帰る前に様子見に行こうかな？

「それと、本田。」

「・・・。」

「本田？」

「・・・。」

「本田 桜さん？」

「・・・。」

「桜！」

「へい！」

桜は、いきなり呼ばれて声が裏返ってしまった。
クラスのあちらこちらから笑い声が聞こえる。

うわ～～ん！ 恥ずかしいよ～～！

「苗字が変わったばかりで気づかなかったのか？」

まあ、それはいいとして。 お前宛に荷物が届いているから早く

事務室行けよ？」

「？はい・・・。」

荷物・・・？

転校の書類かな？

キンコンカンコン

「じゃあ、HR終わるぞ。」

級長の合図で全員で礼をした。

@@@

HRが終わった後、事務室へ向かった。

「失礼します。鈴・・・本田 桜です。」

事務室に居たのは、事務員の後藤さん（69）だ。
学校では、結構評判のいい事務員の人だ。

「ああ、待ってたよ。」

さつき、なんかこれとこの手紙を桜に渡してくれって泣きながら
言われてな。

「どのだれか聞いたら、何も言わず走って行っちゃってよ。」

そう言っで渡されたのは、

私の旅行用の大きい鞆と手紙だった。

旅行用の鞆には、私の着替えやドライヤー、靴などこれさえあれば
生活できるようになっていた。

桜は次に、手紙を読んだ。

桜へ

別れるのがつらくて、こうして手紙だけを置いていく私たちを許し
てください。

この15年間、いろいろあつて楽しかったね。
学園に行っても、私たちのこと忘れないでね。

多分、あなたがこの手紙を読んでいるころには私たちは、飛行機の

中です。

今日は、優斗君の家に泊まれるようになっていきます。

さようなら、元気でね。

＊＊、＋＋より

＊＊＊

それは紛れもなく、養父たちのものだった。

え、嘘・・・。

私、もしかして捨てられた・・・？

嫌だよ・・・。

なんで・・・。

お兄ちゃん、嘘だよね？

なんでこんなに私から幸せを奪うの？

なんでこんなに私から自由を奪うの？

なんで・・・。

気が付いたら、私は泣いていた。

第15話 「知らされた残酷な運命 7」 (後書き)

もしかしたら、あと1話で終わらないかも・・・。

第16話 「知らされた残酷な運命 8」

その日は・・・いやその日もといっているくらいだ。
その日も桜は、授業中ぼおっとしていた。

「では、この問題を本田。」

「・・・。」

「本田？」

「・・・。」

「本田??」

先生が呼んでいる声なんて私の耳には入っていなかった。
だって、今の私は・・・。

「桜、先生に呼ばれてるよ!」

と、と隣の彩菜が教えてくれてやっと気が付いた。

「はいっ!」

「どうした?本田、ぼおっとして。」

「いえ、なんでも・・・ありません。」

「まあいい。では、この問題解いてくれ。」

「はい・・・。」

その問題が簡単で助かった。

実をいうと、予習も何もやっていなく、

難しかったら、先生からお叱りを受けるところだった。

まあ、この先生はそこまで怒んないけど・・・。

@@@

結局、その後先生にあてられることなく終わった。

下校中、ふと考えたらその道は今までの家への通学路だった。

ああ、今までの家はもう私が帰る家じゃないのか……。

そう感じた途端、涙が止まらなくなった。

道を歩く人がどんな目で見ようと涙は収まらなかった。

そのまま、声を上げた。

道の端で泣いているので、近くを歩く人が避けようと、より変な目で見られようが関係ない。

私は、ずっとその場で立ちながら泣いていた。

@@@

うわさを聞いてやってきた優斗の両親は、

「大丈夫だよ。」とか、「がんばって。」と言っていた。

がんばるってなんだろう？

大丈夫って何が大丈夫なのだろう？

なんで、大丈夫なのだろう？

その時私は、今までのこともあり卑屈になっていた。

そんな私でも、迎えに来てくれたのは、

あったかい人だった。

@@@

「「ただいま。」」

「お邪魔します。」

私は、本当に優斗の家に泊まることになっていたらしい。
養父たちの言葉を信じていなかったわけではなく、
もう何が真実ほんとうなのか分からなかったからだ。

「あ……。もう来たんだ。」

「もう来たんだ、じゃないだろう?」

「でも……。」

そこへ、優斗が来た。

あれ? なんで優斗元気なの?

今日、学校休んだじゃん……?

「今日は、明日の準備で休んだだけ。」

「なんで、心の中呼んでるの?

その前に、明日って何かあったわけ?」

「まあ、詳しい話は明日……。」

「明日かよ!」

「まあまあ、桜ちゃん。」

まず、晩御飯食べようか。」

「はい。」

優斗の家での晩御飯は、このごろできなかったある意味理想的な晩御飯だった。

「ご馳走様でした。おばさんのご飯、おいしかったです！」

「ありがとう。よかったわ、お口にあって。」

「それと、桜ちゃん。」

「今から、部屋に案内するね。」

「何から何まで、ありがとうございます。」

「ううん、大丈夫だよ。」

「それにもう、これぐらいしかできないからね。」

「いえ。いままでたくさんのことをしてもらってますから。」

「そうだ！ねえねえ桜ちゃん。これ、あげるね。」

そういつて渡されたのは小さなチャームの付いたネックレスだった。

「これね、おばさんが作ったの。」

「おばさんが？」

「そう。ちょうど桜ちゃんにぴったりだと思っわ。」

もし小っちゃくなったらネックレスのひもを短くしてキーホルダーにしてね。」

「ありがとうございます。大切にします。」

そういつて、リビングを出た。

第16話 「知らされた残酷な運命 8」 (後書き)

途中、優斗のキャラが違うのは気にしないで……。
もう、頭の中が大変なことになってるから……。。

第17話 「知らされた残酷な運命 9」

私が通してもらった部屋は、私一人で使うには少し広い部屋だった。

「今日も、いろいろあつて大変だっただろうから早くお休み。

あと、お風呂入りたいときはリビングに僕たちがいると思うから一声かけてね。」

「はい。ありがとうございました。」

「じゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさい。」

そういつて、おじさんは、部屋を出た。

もう、疲れた・・・。

そう思い、敷いてもらった布団に横になった。
そのまま、桜は眠りについた。

@@@

「おはようございます。」

「おはよう、桜ちゃん。夜はよく眠れた？」

「はい！ ぐっすりです！」

「それはよかった。」

「そういえば、優斗は・・・？」

「ああ、あいつ今朝練無いから少し遅いよ。」

「そうなんですか？」

「でも、朝ごはんができるころには起きてくるよ。」

「そうですか・・・。」

あの、昨日眠くて寝てしまってお風呂入っていないんでシャワーだけでも借りていいですか？」

「ああ。もちろんいいよ。」

そうして、私はお風呂に通してもらった。

その後、シャワーを浴びて、ちょうどいいからと制服に着替えた。リビングに向かうと朝ごはんができていた。

そこには、おじさん、おばさん、そして制服姿の優斗がいた。

「遅い。」

「悪かったですね。遅くて。」

「まあまあ、二人とも。早く食べよう。」

「いただきます。」

そうして私は、【日本】で最後の食事をとった。

@@@

今日は、ちょっと用があるという優斗に付き合って、少し早めに出た。

そうして向かった先は、学校だった。

「ちょっと優斗！ 学校に用があるの？」

「そうじゃないよ！」

しかも、学校って言っても、体育館の裏だよ！」

「なんでそんなところに？」

そんな話をしながら体育館裏についた。

「桜、今日桜が学校にいるの半日だし、
あとからだと言えないから今言つよ・・・。」

桜、今まで好きだったんだ!」

え・・・。

これは、まさかのドッキリですか？

「ごめん・・・。今まで言えなくて。」

でも、転校する前に言いたかったんだ。

ちなみにこれ、嘘でもドッキリでもないから（笑）」

ドッキリでもないらしい・・・。

じゃあ、これはほんとうの告白？

やだ・・・。泣きそう。

でもこれって、私の気持ちをいうチャンス？

「私からも、一言いい?」

「いいよ。」

「私も小さいころから好きだったの!!」

「!?!」

「ちなみに嘘じゃないからね！」
「ありがとう！」

あと・・・これ。」

そういつて差し出されたのは、すごくかわいいキーホルダーだった。

「お袋みたいに、アクセサリとも思っただけど
アクセサリっていつも身に着けていられるものじゃないだろ？
だから・・・。」

「ありがとう！大切にするね！」

「うん！」

もうそろそろ行かないと怪しまれるから行こうか・・・。」

「だね！」

どこまでは元気だったもののやはり泣いてしまった。

「泣くなよ！」

「だって、これが優斗と二人で話す最後なんだと思ったら・・・。」
「ばかだなあ」桜は。

直接話せるのは最後かもしれないけど、メールだって電話だって
あるだろう？」

「だって。。。。」

「もう、桜は・・・。」

そこまで言っつて優斗は、私の涙を指で拭ってくれた。

ありがとう優斗・・・。

私・・・新しいところでも頑張るから!!

第17話 「知らされた残酷な運命 9」 (後書き)

なんか・・・優斗が毎回キャラ違うような気がする・・・。

私、オリキャラ下手ですね(笑

そして、プロローグ完結！

かなり中途半端な気もするけど・・・。

第1章もこうご期待！！

第18話 「私の新しい生活 1」 (前書き)

他の方に言われて初めて気が付いたこと

菊殺したけど

台湾とか、トルコとかどうやって出すんだろう・・・。
そこまで考えていなかった(笑)

ちなみに今日は学校の創立記念日だから休み
てなわけで、鬼の居ぬ間に投稿・・・。(笑)

第18話 「私の新しい生活」1

その日、私は暇さえあれば優斗と話していた。
話すたびに湧き上がる涙をぐっとこらえながら・・・。

最後の授業はHRだった。

クラスメートの皆が、秘かに先生にお願いしてHRにしろ、
桜の送別会をした。

桜は、優斗が昨日休んでいた理由は送別会これの準備だと聞いてびっくりした。

送別会ではゲームをして、楽しんだ。

が、最後のほうになってみんなからひと言ずつメッセージをもらい、
桜は涙腺が壊せるほど泣いた。

みんなからのプレゼントとして真ん中に空白を残して寄せ書きをした【色紙】をもらった。

秘かに隣にいる優斗に聞いた。

「なんで、真ん中が空いてるの？」

「決まってんじゃない！」

そこに今日の写真を張るためだよ！

その後、先生がクラス写真を撮ってくれ、
大急ぎでプリントし【色紙】の真ん中に張った。

@@@

学校の校門でルートとギルベルトが車の前で待っていた。
校門の前までみんなが付いてきてくれた。
そんなみんなに振り向いて桜は笑顔で言った。

「みんな、ありがとう!!」

そう言って桜は二人の元へ歩いて行った。

「・・・もういいのか？」

もう会えなくなるんだぞ？」

「大丈夫です!」

「そうか・・・。」

そういつて三人は車に乗り込んだ・・・。

さよなら、私の日常・・・。

さよなら、優斗・・・。

第19話 「私の新しい生活 2」 (前書き)

とてもお待たせしました!!

(誰も待ってねー)(殴

まあ、独り言はともかく れっつ ごー!!

第19話 「私の新しい生活」 2

それから、十分ぐらい桜たちは黙っていた。
だが、皆この空気は苦しいと思っていた。
そんな中……。

「……あ。」

ギルがやつと口を開いた。

「どうしたんですか？」

「そういえば、【国】については話したけど俺らがどこの【国】か
伝えてなくね？」

「あつ……。」

「そういえばそうだな。」

「だろ？」

「というかこの場合、自己紹介もすごく簡単にしかしてないから
そっちもしたほうがいいんじゃないか？」

「確かにな……。」

「それじゃ、俺様から！」

「ギルベルト・バイルシュミットだ。」

「プロイセンって【国】でもある。」

「（自己紹介ってこっちもすごく簡単……。）」

「あの……。プロイセンってかなり前に滅んだのでは？」

「ああ。だが、こうして存在する。」

「俺様が俺様でいられるんだったら、【亡国】だろうが構わない。」
「……。」

『俺様じぶんが俺様じぶんでいられるんだったら、【亡国くこく】だろうが構わない。』
その言葉は、ギル本人の本音であり、
これから会うであろうほかの国や兄が思っていることではないか？
そんなことを桜は思った。

「次は俺だな。

ルートヴィッヒ・バイルシュミットだ。

俺はドイツだ。」

「ドイツ・・・

聞くことはよくあるけど行ったことないです。」

「じゃあ、今度来るといい。

案内だったら、いつでもやるからな。」

「ありがとうございます！！」

その後、学園につくまで3人はたわいもない話をしていた。

第19話 「私の新しい生活 2」 (後書き)

ほんつつと

毎度毎度駄文ですいません!!

次から学園編です!

そして今きずいたけど20話目だわ

こんな馬鹿がここまで書けるとは・・・!!

第20話 「私の新しい生活」 3

「・・・着いたようだな。」

話をしている最中、ルートさんがつぶやいた。

「・・・では、改めて。」

ようこそ、本田桜さん。

ここが、ワールド学園、通称W学園です。」

「・・・!」

そっぴいながらルートさんが車のドアを開いた。

ドアの先には、古い洋館のようなきれいな建物がいくつも見えた。正面にある一番大きい建物にはツタが張っていて、時代を感じさせていた。

「これが本部。」

学校長室や生徒会室など学校生活にはならない場所が集まっている。」

他には、大ホール、倉庫、図書室、売店などがあるらしい。

「説明は、学校長に挨拶してからだな。」

そう言って二人が学校長室に連れて行ってくれた。

だが、学校長室の前で

「お前だけ行つてこい。」

「？　なんでですか？」

「なんというか・・・いろんな意味で凄い人だから俺たちと一緒にだと大変なことになるからな・・・。」

@@@

「失礼します。転校生の本田桜です。」

「入ってくるのである。」

セダ　　ン！！

「！！！」

「ああ・・・。すまないである。」

お前の後ろに人影が見えたのでな。」

「そつ・・・そうだったんですか・・・。」

「改めて、W学園へようこそである！」

そこにいたのは、学園長というには若い銃を持った青年だった。

第20話 「私の新しい生活 3」 (後書き)

口調でわかってちゃいますよね・・・。

第21話 「私の新しい生活 4」 (前書き)

中間終わった~~~~~!!

第21話 「私の新しい生活 4」

がっ学園長先生・・・？ なわけないですよね・・・。

「紹介が遅れたな。この学園の学園長をしているバッシュ・ツヴィンクリである。」

あっ！ 学園長先生なんですね。
まだ信じられませんけど・・・。

桜はそんなことを思っていると、

「ようこそである。たしか・・・本田桜だな？」

「はい！ 今日、この学園に転校してきた本田桜です！」

「似ている・・・。やはり兄妹ということか・・・。（ボソッ）」

「はい？ 何か言いましたか？」

「いや・・・。

それより、ここがどんなところか知っているか？」

「いえ・・・。あまり・・・。」

「それでは、簡単に説明するのである。」

@@@

それから、バッシュ先生は『簡単に』と言っておきながらかなり話していた。

要約するところだ。

・ここは、桜たちのように【国】になったものしか入学できない。

- ・退学、中退、卒業はない。
- つまり、一度入学したら出られない。（しかし、例外もある。）
- ・全寮制
- ・おこずかいが月に1度決まった金額出る。
- ・しかし、【上司】が出した【仕事】をするとおこずかいが増える。
- ・一人一人、【上司】がつく。
- ・ここに先生は、学園長先生と寮母の方しかない。
- ・そのため、学園とつくが授業がない。

@@@

「これで、一応生活に困らないだろう。」
「あつ・・・ありがとうございます！」
「あとは、他のものに聞くのである。」
「はい。」

「それでは、お疲れである。」
どうせ、外で二人が待っているはずだから、早くいくのである。
「失礼します。」

（てか、二人共待っててくれてるんだ・・・。）

@@@

そう言って学校長室から桜が出た後、

「やはり、【日本】になりかけている・・・。
あの言葉づかいが取れなくなったり、小さいころの記憶をなくし

ていくのであろうな・・・。

しかし・・・、【日本】になるまでの期間が短すぎる・・・。
そこが少し気になるな・・・。」

バッシュはそうつぶやいた。

第21話 「私の新しい生活 4」 (後書き)

毎回のことがながら短いし、筋が通ってないし・・・。

これ、悪い例にしかありませんよね・・・？

多分、次からキャラが増えます(笑

第22話 「私の新しい生活 5」 (前書き)

これ以外にも桜ちゃんの話を書きました。
ここの桜ちゃんとは全く別の性格の。

こんがらないように気を付けます!!

第22話 「私の新しい生活」 5

ドアを開けると、二人がいた。

「だいぶ時間がかかったな。」

「すいません！ 学園長先生のお話が長くて・・・。」

「いや。気にするな。」

「というか、待っていてくださったんですね！

ありがとうございます。」

「んまつ、気にすんなよ！

そつえば、学園の建物の説明がまだだったな。

学園長、建物案内やってないだろう？」

「えっ！どうしてわかったんですか？」

「学園長はそういうことが苦手なんだ。

それは置いといて、行くか！」

「はい。よろしく願います。」

こうして三人は本部を出た。

@@@

その後、三人は学園内では小さいほうに属するであろう、しかし一般の人が見たら金持ちだと思っであろう豪華な建物についてた。

「ここは、高等部。世間でいう高校のようなところだ。」

「？ 授業はないんじゃないんですか？」

「なんだ？ それ学園長から聞いたのか？」

「はい。」

「ケセセセ。」

確かに授業はねえけど、試験があるからその前とか、あと、勉強熱心な奴らは仕事がないときに集まって勉強するぞ。」

「そうなんですか。」

「というか、授業がないのにどうやって試験をするんですか？」

「寮の自分の部屋になぜか参考書が大量にあるんだ。」

その中から試験範囲だけ掲示するような形であとは各自で勉強しろ、ということだ。」

「そう、なんですか。」

「そして、成績トップ10がおこずかいアップ、ワースト10ぐらいがおこずかいダウン、だったはずだ。」

「なるほど！」

あの、おこずかいって月いくらなんですか？」

「大体、入学当初で高等部 1万、 中等部 5千円 ぐらいだ。」

あとは、【仕事】の難易度にもよるが、月10回程度で5千円だな。

成績上位を1回で2千円程度上がるな。

成績下位を1回で同じ程度下がる。」

「かなり高いですね。」

「ちなみに頑張って月10万にしたやつが前、いたな。」

「1万をですか!？」

「いや……。たしかそいつは中等部だったから5千円からだ。」

「なんですか、その人!？」

「もはや、すごいとしか言いようがないです。」

第22話 「私の新しい生活 5」 (後書き)

ビバ・W学園編!!

もう、楽しすぎますよ!

第23話 「私の新しい生活 6」 (前書き)

なんか あっちの話とこっちの話が混ざっちゃいそう・・・。

第23話 「私の新しい生活 6」

その後、3人は高等部から10分ほど歩いたところにある寮を目指していた。

桜はその間この広さや

整備された何十人が横に並んで歩いてもまだ余裕がありそうな歩道に驚いていた。

あちこちよそ見そうしていた桜に気付いたらしくルートが声をかけた。

「・・・ん？　なんかあったか？」

「いえ、ただ・・・。」

「ただ？」

「今までの私と住む世界が違うなあと。」

「確かに外の世界とは全く違うな。」

ここは中世の【国】が誰にも気づかれないようにと作られた場所らしいからな。」

「そうなんですか？」

「ああ。ここは一般人には気づかれないから攻撃されることもない。だから、【国】が自分たちの安全のために作った、と予想されているんだつたよな？」

「兄さん、『よな？』ってここで生活して何年にもなるんだからもうちよつと確信を持って言ってくれ。」

その言葉で桜はふと思った。

「お二人は【国】になって何年になるんですか？」

「たしか俺も兄さんも13年ぐらい前にお呼びがかかったよな。」

「えっ！　じゃあ、すごく小さいころから？」

「ああ。たしか俺様が7歳、ヴェストが5歳だったはずだな。」

「すごい……。」

「ちなみにお前の兄さんは2歳ぐらいから【日本】だったらしいがな。」

「つてことは……、私が生まれた後にはもう……。」

「ああ。だから奴はすごい。」

俺らは【国】になった後、兄弟以外拒絶していた。特に親に……。

ここにいるほとんどの【国】はそうだ。

『ああ、なんで親は自分をこんな目に合わせるんだろう』つて家族を拒絶する癖がついていく。」

「昔、ひどいときには寮の自室に閉じこもったり、自殺未遂を起したり、

他人に対して殺意を向けたりするやつもいたらしい。」

「そんな中にお前までいたらかわいそうだと思った奴はお前を養子に出した。」

実をいうと、奴もお前以外の家族は拒絶していた。自分とお前が一番別れがつかない時に」

「まあ、養子に出した後しばらく一人でさびしそうにしていたがな。」

桜は初めて兄を少し知れたような気がした。

そっか、お兄ちゃん一人でがんばってたんだね。

家族を拒絶していたんだね。

ありがとう。

私を拒絶しないでくれて
私を見捨てないでくれて。

そして、ごめんなさい。

今まで、ひどいこと言っ

て。そんなになるまで一人でがんばってくれて。

そう思った桜は自然と涙がこぼれていた。

第24話 「私の新しい生活 7」 (前書き)

。。
なんかもう一つのほうにむいちゃってこっちほっぽってましたわ・・

第24話 「私の新しい生活」7

泣いている桜に二人が気づいた。

「どっ！どうしたんだ？」

「いえ・・・何でもないです・・・。」

「そうか？　なんかあったようにしか見えないんだが？」

「そっそれより早く寮行きましょう！今日のうちに荷物整理したいんで。」

「ああ・・・。わかった。それと、学校では俺らは国名で呼び合っているんだ。」

「本名だと略しづらい奴や本名が長い奴がいて面倒だから、

せっかくだから国名で呼び合おうって事になっているんだよ。」

「そうなんですか・・・。」

「・・・ということは私の場合、【日本】って呼ばれるんですか！

？」

「まあ、そういうことだな。」

そんな会話をした後、桜たちは寮に向かった。

@@@@

その後、三人が付いた建物は小さな学校の校舎ほどの大きさしかなかった。

「ここが寮だ。」

「まっ！

一言でいうとここの学生全員がここに住んでる大きな俺らの家つてところだな！」

「……。」

意外だった。

ここまで見てきた建物はほとんど今までいたところでは考えにくいほど大きかった。

しかし、寮だけは今までにも見たことがある大きさだった。

「……意外です。」

「どうした？」

「いや……寮っていうので今まで見た建物より大きいのかと思ってたんで。」

「確かにこの建物は小さいよな。」

まあ、全校生徒が少ないからこれだけで済むんだ。」

「へえ。」

「だけど、全員が集まれるホールも5つぐらいあるし、

一つ一つの部屋が大きいからここまで大きくなったんだ。

それらがなければ、ここまで大きくならない。」

「といっても、一つの部屋に2〜3人の相部屋だけだな。」

「相部屋だとしても一部屋が大きいけどな。」

「なるほど……。」

ちなみに私は誰と相部屋になるか知ってますか？」

「俺らもそこまでは知らない。」

たしか、アジアの奴はアジアで集まるはず……だったよな、ヴエスト？」

「ああ。だから香港、台湾……辺りが妥当じゃないか？」

「あいつらか。」

「あの……。香港も台湾も【国】ではないと思うのですが？」

「あの二人は特例で【国】じゃないけどここにいるんだ。」

その後、寮の部屋割りを聞いてびっくりした。

相部屋に二人が言った通り香港と台湾になったからだ。

第25話 「私の新しい生活 8」 (前書き)

学校で何やってんだよ!!

という突っ込みはなしで(笑)

第25話 「私の新しい生活 8」

「ん．．．。」

5時だ。

桜が起きた時には2人とも起きていた。

しかし、香港は散歩に行っている為部屋にいるのは台湾と桜だけだ。

「あ．．．おはようございます。」

「おはヨ～～！」

「皆さん早起きですね！」

「1番早かったのは日本さんだったけどネ．．．。」

日本さん．．．。どうして自殺なんか．．．。」

見ると台湾は泣いていた。

聞いたところ台湾は、日本が死んだ後から涙もろくなっただらしい。

そして、今はそれを慰め担当が相部屋の香港と桜だ。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫．．．。『ではないですよね？』．．．はい。」

「台湾．．．。また泣いてる的な？」

「香港さん、お帰りなさい。」

「ん．．．。台湾、悲しいのは分かるけど泣き過ぎ．．．。」

1度泣き始めたらなかなか泣き止まないの

で二人はその後、朝食までの間ソファで横になっていた。

転校してきて2日目の朝にして早くも桜はくじけそうだった。

第25話 「私の新しい生活 8」(後書き)

学校でやっている為、こころなしか少ないですよね・・・。

あと、次回予告・・・らしきもの

「ここでは何をするの？」

「もう！さっき言いましたよね？ 次回予告をするんです！」

「それはそうと次何やるか知らないんですk」「それなら大丈夫です

！・・・あつそ。」

「さつさと進めちゃいますね！」

次は今回の話の前夜話のお話です！」

「それって作者のてぬk」「そんなわけじゃないですよ！！」

思ったんだけど俺が言ってる最中に日本、入りすぎ・・・。

「すいません・・・。」

}}end}}

第26話 「私の新しい生活 9」 (前書き)

やっとネット繋がりました！
ご迷惑おかけしました。

第26話 「私の新しい生活」9

前夜

「えっと、すず・・・本田 桜です。
みなさんよろしくお願いします。」

その日、桜達は寮監達のところへ挨拶に行った。
寮監達は鍵を渡したり、諸注意を書いた紙を渡したりした。

「あとは、相部屋の人に聞いたり、するといいよ。」

「はい！これからお世話になります。」

「・・・それにしても君が菊君の妹さんか。」

「たしかに雰囲気とか似ているね。」

「・・・。」

桜はそれに対して、何も言えず困った顔をしていた。

それに気が付いた寮監のうちの一人が場を濁すように

「とりあえずみんなとなかよく頑張りなさい。」といった。

@@@@

寮監室から出た桜とルート達はそこで別れ、桜は自分の部屋へと向かった。

アジア組は2階なので階段を上った。

先ほど渡された鍵には『204号室』と書いてあった。

自分の部屋を探し、入ると二人いた。

一人は二つに編んだ三つ編みを垂らして泣いている少女、

もう一人はそれを慰めていた。

「あの・・・204号室はここですか？」

桜が問うと二人は桜を見た。

「誰？」

「えっと、今日から転校することになった・・・本田桜です。
よろしく願います。」

「話は聞いてたけどこの部屋だっただ・・・。

えっと・・・私は台湾・・・よろしく・・・。」

「・・・日本だっけ？・・・俺は香港。

この部屋大変だけど頑張れるな？」

「これからよろしく願います！」

「日本の・・・筆笥とベッドはこっただけど入らない時は私のとこ
に置くといいね・・・。」

「あっありがとうございます！」

第26話 「私の新しい生活 9」 (後書き)

あああああ台湾の口調(?)がわかんない・・・。

しかも香港とギリシャがごっちゃごっちゃに・・・ (泣)

しかも、かなり中途半端!

みなさん、久々だからと温かい目で見てください!

第27話 「真実を知らされた国 1」 (前書き)

えっとサブタイで気づいたと思いますが章の中での小さい章が新しくなります！

前回の小さい章が中途半端な理由は聞かないでください(泣)

でもちゃんと新章になったということでは

キャラはここでかなり増える(予定・・・)

第27話 「真実を知らされた国」1

8時だ。

「おはようございます、香港さん！台湾さん！」

学園に入学してから1週間がたった。

その間はなんの変化もなく、日本はただ台湾と香港と話をして過ごしていたため部屋から出ることはほぼなかった。その間に桜は【日本】と呼ばれることになった。本名が【本田 桜】になったこともすっかり理解し、自分が【鈴木 桜】であったことも遠い過去の記憶とともに消えかけていた。

「遅いな？」

「でも時間がたくさんあるんだし別に大丈夫ネ！」

「けれどもかなり遅いですね・・・これからは気を付けます！」

変化があつたのは日本だけではない。台湾も泣くことがほぼ無くなった。そして2人とも【本田 菊】が死んでから落ち着きのなかったが????香港はそうも見えなかったが????かなり正常に戻りつつあった。さらに今は日本が早くなれるようにと午前中は【日本】、午後は【本田】と呼んだ。【本田】はまだしも【日本】と呼ぶと最初は違和感があつたがそれすらも感じなくなった。日本がその呼び方をされてすぐ反応するようになったのは2日後だったが・・・。

「あっ！」

「日本、なんかあつた的な？」

「今日ってテスト範囲が貼られる日じゃないですか!!！」

「そういえばそうネ！」

「どこに貼られるんでしたっけ？」

「たしか高等部の門にある掲示ば・・・。」

「それじゃ行つてきます！！！」

「あ・・・。」

そう言つて桜はすぐ着替えて出かけた。

@@@

「あつ！ル・・・ドイツさん！」

「ああ、日本か。これを見に来たのか？」

「はい！・・・というかここつて中等部と高等部しかないんですか？」

「一応大学のようなところはあるが、そこに行つても内容以外まったく変わらない。」

そこが終わると上司からの仕事が半端なく来るらしいな・・・。」

「そうなんですか！！・・・というかドイツさんつて高等部だったんですか！？」

「ああ、一応お前とは1つ違いだ。」

そこまで聞いて驚く間もなく日本はある人物に抱きつかれた。

第27話 「真実を知らされた国 1」 (後書き)

書き方が違うのは気にしないでください。

読みづらかったら元に戻すので言ってください！

最後の人物って誰でしょうね (笑)

ちなみにドイツでもプーでもないですよ？

(そんなことやったらすごく作者はうれしいけど)

第27話 「真実を知らされた国」 2 (前書き)

お久です！

第27話 「真実を知らされた国 2」

びつくりした日本の目に飛び込んできたのは茶髪の青年だった。

「はじめまして！俺、フェリシアーノ・ヴァルガス！イタリアだよ！！」

君かわいいね！どこから来たの？」

「こら、イタリア。いきなりナンパするな！」
「ヴェ・・・。」

「えっと、どうもイタリアさん。私、日本と言います。」

「えっ！じゃあ、君が菊の妹さんなんだね！菊にそっくりだね！」

そう言われた日本は困ってしまう。

兄といわれても名前も顔も性格も何も知らないのだから当然だろうが。

「菊はね、ずっと俺たちと一緒にいたんだ。

だから菊のことを一番理解していると思ってたのに・・・。」

「イタリアさん・・・！！」

その時、日本はぐらついた。

「大丈夫か！？」

「・・・大丈夫です。ちょっと疲れているみたいなので寮に戻ります。」

「そうか・・・。」

そう言って、その日3人は別れた。

@@@

日本が帰ってきたとき、台湾と香港は漫画について熱く語っていた。

「あっ！日本、どうしたの！？」

「かなり顔色悪い的な？」

「大丈夫です。ちょっと疲れているみたいなので横になってます。」

「・・・・。」

そう言ってベッドに潜り込んだ日本は次の日の夕方まで目を覚まさなかった。

第27話 「真実を知らされた国 2」 (後書き)

フェリ初登場！

ここまで出てこなかったことが間違いだと思っけどね。

第28話 「真実を知らされた国 3」 (前書き)

一か月ぶりぐらいですよね？

その割に長くないけど・・・ (笑)

今回は桜が眠り始めた日の次の日のお昼頃です。

第28話 「真実を知らされた国」 3

丸一日寝ている桜がさすがに心配になってきた台湾と香港は話していた。

「あれから丸1日以上寝てるなんて体調悪いのかな？」

「俺が思うに記憶が飛び込んで来た的な？」

「！！でも、桜は日本になってからまだ日が・・・。」

そこまで台湾が言うとチャイムが鳴った。

「すまん。日本はいるか？」

そういつて入ってきたのはドイツだった。

昨日の日本の様子がおかしかったので会いに来たらしい。

「日本は昨日帰ってきてから寝てる的な。」

「でも、昨日帰ったのはお昼にもなってなかったはずだぞ？」

「その後から起きてこないんだよ」

「で、記憶が飛び込んだきたんじゃないかって話し合ってた的な。」

「・・・俺がドイツになったときは1ヶ月くらいで

そうなって少し早いんじゃないかって学園長は言っていたぞ？

それから考えるとまだ2週間も経ってない・・・。」

「だからもしかすると、菊は・・・。」

そこまで香港が言っていると隣の部屋とつながっているドアが開いた。

「おはようございます。あっ！ドイツさんもいらしていたんですか

「？」

そう言って今まで噂されていた本人が起きてきた。

第28話 「真実を知らされた国 3」 (後書き)

そういえばドイツの年齢がかなり矛盾していたので直しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4305t/>

私、日本ちゃんになりました！！

2011年10月10日12時24分発行